

乳幼児保健指導のあり方に関する研究

高野 陽（国立公衆衛生院）
園田真人（北九州市衛生局）
稲葉 博（広島県公衆衛生課）
小田清一（鳥取県健康対策課）
尾山京三（富山県公衆衛生課）
加藤忠明（日本総合愛育研究所）

I. 研究目的

現代の社会情勢のもと、乳幼児の養育が健全に実践されるためには、乳幼児に対する適切な保健指導の確立が望まれる。特に、少産時代のなか、家庭においても、地域社会においても「子ども」の数が少なく、母親自身が育児に関する「生きた体験」をせず、育児の対象となる乳幼児も「子ども同士」の接触なくして育ってくる。また、急激に進んだ高齢者社会のなかで、小児の存在価値は新たな意義さえ有しているといわれている。このような背景のもと、激しい変容をみせる社会に適応した養育を援助するために、いかなる保健指導の展開が必要であるかを検討し、障害の発生予防・健全育成に有効となるべく資料を得ることを目的とした。

それ故、乳幼児期のあらゆる時期において、種々の地域特性のもとに、適切な乳幼児保健指導のあり方を検討することにした。

II. 研究方法

今年度は、乳幼児保健指導における種々の問題点を検討するために、保健指導の対象に関する問題点・地域特性を考慮した保健指導の問題点を明確にすることを目的として研究を実施した。

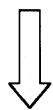
地域特性としては、都市と農山村を選定し、東京都内・川崎市・北九州市を都市部、富山県砺波市・広島県内・鳥取県内を農山村部の対象とした。また、保健指導の対象としては、新生児期、乳児期、幼児期と幅広く選定した。さらに、指導にあたる人的条件についても研究を進めた。

III. 研究結果の概要

東京区部や川崎市においては里帰り分娩例が多く、それに対する保健指導が大都市では今後重要な位置を占めることになり、里帰り先における母乳栄養の確立を図ることに努める必要がある。一方、北九州市は都市部としては特徴ある乳幼児健診システムを確立していたが、その再検討が必要とする時期に至ったことも、都市における新しい乳幼児健康管理のあり方を示唆している。

新生児期の保健指導は重要な要素を含蓄している。その指導担当者の実態、指導実施状況などは必ずしも十分なものであるとはいえず、指導内容も今日的な事態を適切に満足しているとは断定できない。特に、地方においてはその傾向はより明確である。

また、乳幼児の保健指導を担当する保健婦の意識は地域特性、特に出生数と密接な関係があることも指摘され、指導の対象の把握と同時に指導担当者についても配慮する必要があることも明らかにされている。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



1. 研究目的

現代の社会情勢のもと・乳幼児の養育が健全に実践されるためには、乳幼児に対する適切な保健指導の確立が望まれる。特に、少産時代のなか、家庭においても、地域社会においても「子ども」の数が少なく、母親自身が育児に関する「生きた体験」をせず、育児の対象となる乳幼児も「子ども同士」の接触なくして育ってくる。また、急激に進んだ高齢者社会のなかで、小児の存在価値は新たな意義さえ有しているといわれている。このような背景のもと、激しい変容をみせる社会に適応した養育を援助するために、いかなる保健指導の展開が必要であるかを検討し、障害の発生予防・健全育成に有効となるべく資料を得ることを目的とした。

それ故、乳幼児期のあらゆる時期において、種々の地域特性のもとに、適切な乳幼児保健指導のあり方を検討することにした。